

# 明大校友会西東京だより

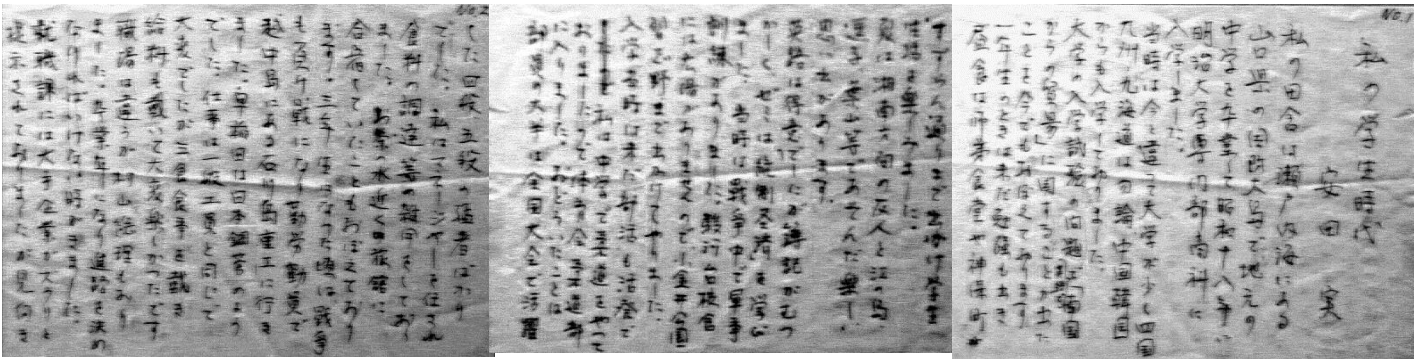


## 私の学生時代 「第二弾」 !



### 『私の学生時代』

安田 實 (昭和18年 専門部商科入学)



私の田舎は、瀬戸内海にある山口県の周防大島です。地元の中学を卒業して昭和 18 年に明治大学専門部商科に入学しました。当時は今と違って大学が少なく、四国、九州、北海道は勿論、中国、韓国からも入学しておりました。大学の入学試験の問題では、英語で「南国からの貿易」に関する事が出たことを今でも覚えています。

一年生の時は未だ勉強もでき、昼食は師弟食堂や神保町のすずらん通りまで出掛け学生生活を楽しみました。夏は湘南方面の友人と江の島、逗子、葉山等で遊んだ楽しい思い出があります。英語は得意でしたが簿記が難しく、ゼミは「統制経済」を学びました。当時は戦争中で軍事訓練がありました。駿河台校舎には広場がありませんので、小金井公園や習志野まで出掛けました。

入学当時は未だ部活も活発で、私は中学で柔道をやっておりましたので体育会柔道部に入りました。驚いた事は部員の大半は全国大会で活躍した四段、五段の猛者ばかりでした。私はマネージャーを任せられ、食料の調達等の雑用をしておりました。お茶の水近くの旅館に合宿したことも覚えております。

三年生になった頃は戦争も負け戦になり、勤労働員で越中島にある石川島重工に行きました。早稲田は日本鋼管のようでした。仕事は一般工員と同じで大変でしたが、三食の食事を戴き、給料も戴いて大変楽しかったです。職場は違うが、村山元総理もおりました。

左から二番目の柔道着姿が私⇒

卒業年になり、進路を決めなければいけない時が来ました。就職課には大手企業がズラリと提示されておりましたが、見向きもしませんでした。私は海軍士官にあこがれ、海軍予備学生を希望しました。東京大学で試験があり、試験問題の中で「ピタゴラスの定理」があったことを今でも覚えております。合格通知が来まして、時の総長



鶴沢先生に「日の丸の旗」に揮毫して頂きました。そして卒業前の九月に、土浦海軍航空隊に入隊しました。その後、三浦半島、館山等で訓練をし終戦になりました。従って私には卒業証書はありませんが、この「日の丸の旗」が卒業証書と思い、今でも大切に保管しております。(大正13年生まれ、現在93歳)

## 『吉田君、ココは下座だよ!』

吉田昌弘 (昭和55年 経営学部卒)

明治大学学生時代の思い出は数多くありますが、その中でも山田雄一先生から叱責された思い出が今でも忘れられません。山田先生は明治大学の学長を務められた先生なので、ご存じの方もいらっしゃると思います。やさしく厳しい先生でした。

当時3年4年時に入室していたのが、経営学部の山田雄一ゼミでした。ゼミのテーマは「組織開発」です。企業組織において効率性と健康性を同時追及する考え方で、「効率的かつ健康的な組織を目指す」研究がテーマでした。



山田ゼミは毎年夏休みに長野県で泊りで夏合宿を行っていました。鈴荘という民宿で行っていました。

その合宿の夕食が始まる時の出来事でした。夕食はたたみの大広間で、ゼミ員全員で先生が席に着かれるのを待っていました。私はゼミ長でしたので、山田先生を夕食の席にご案内しました。

「先生、こちらにどうぞ。」

と、当然上座の席(だと思っていた席)にご案内しました。

民宿のご家族も一緒にゼミ仲間(前列中央の白いシャツが私)

先生は席にお座りにならず、立ったままで、「吉田君、ココは下座だよ!」と大きな声でみんなの前で叫ばれました。

私は慌てました。ごはんの湯気が出ている炊飯器が並んでいる横が当然上座であろうと思い込んでいました。

「ココは下座だよ、君!」

「君は私をココに座らせる気かね。」と大声で言われました。

私はあわてて、「すみません、先生。」

「先生、上座はどちらになるのでしょうか。」

「向こうだよ!」

今いる場所と真逆の場所を指さされました。

私は恐れおののいて、「先生、どうぞあちらへ。」と丁寧にお願いしました。



後列の一人が私

が…、「もういいよ。」…立腹されたまま、その席に座られ動こうとされません。

ゼミ員一同「シーン」となり、楽しい夕食のはずが、気まずい雰囲気の中での夕食となりました。社会人の礼儀・常識である「上座・下座」について叩き込まれたのはこの出来事でした。山田先生にはこの他にも多くの貴重なことを教えていただきましたが、また機会があればご紹介させていただきたいと思います。

## 『明大時代の思い出』

水井高志（昭和38年 商学部卒）



私は昭和34年に入学以来、4年間「経済事情研究部」に所属して、仲間と四年間多くの思い出を作りました。

この部は昭和初期に創部され、私の時代は林久吉教授のもと、刀根丈晴先生の指導で、“配給論”（今はマーケティングリサーチ）を学びました。毎年夏休みに10日ほどの合宿で各地の“実態調査”を行ない、秋の「大学祭」に発表して、調査結果を小冊子にまとめる活動です。

一年目は「八丈島の熱帯植物栽培農家」、二年目は「北海道の甜菜糖栽培農家」、三年目は私たち同期が責任者となり「富山の薬業企業」の実態調査を行ないました。この年に“学長杯”に輝いたことは今でも思い出されます。

大学祭にてゼミ仲間と一緒に！（前列左端の学生服が私）

遠方に行き、10日間も“公民館”などで自炊をしながら寝泊りした仲間ですから、半世紀以上たった今でも同期の仲間と年に一度一泊旅行をして昔を懐かしがっています。

## 『ゼミの入室試験で直談判』

濱田 豊（昭和45年 政治経済学部卒）

学生時代は家庭の経済状況もあり、学業の合間を縫ってアルバイトに精を出したが、それは襖職人であったり、日本全国を列車で飛び回る運送屋でもあった。

それだけでも話題は尽きないが、私にとっては忘れられない思い出がある。それは入試で不合格を宣告されたことだ。入試といっても入学試験ではなく、大学三年の春に行われたゼミの入室試験である。厳しい入学試験は明治中学に入る時以来で、大学も推薦入学だったから、ゼミの入室試験に落ちた時は相当なショックだった。

私は文化人類学の祖父江ゼミを希望した。このゼミは何故か人気が高く、倍率も高かった。試験は四年生が行い、「ミニミニブームについて」の論文提出と英単語の試験、そして面接が行われた。翌日には合格発表があり、私は意気揚々として出掛けて行った。

しかし自分の名前はどこにも見つからない。その時の挫折感たるや大変なものだった。試験らしい試験で、はっきりと不合格になったのだから…。その挫折感や屈辱感は、しばらくすると腹立たしさに変わって行った。



「学生が何を根拠に合否を決めるのか！」  
「そうだ、四年生に訊いても埒が明かないから、先生の所  
に行行って直接訊いてみよう！」

私は家に帰るのではなく、時を置かずしてその日の午後、  
先生宅に直行した。私の家は西武池袋線の石神井公園  
にあったが、先生も同じく石神井に住んでいた。

玄関のチャイムを鳴らす時は流石に緊張した。  
幸いにも先生は在宅されていたので、「ゼミの入室試験で  
不合格になりましたが入れて下さい！」とお願いした。

1969.5.14 漁村調査で新潟県粟島への船上にて(右端が私)

私はOKが出るまで玄関で座り込むつもりだったから腹は据っていた。  
自室に戻ってから書類を手に戻ってきた先生は、あれこれと「断り」のセリフを始めた。  
「浜田君はギリギリの線で残念だったけど… ……」

そうは言われても、簡単に引き下がれない。  
「祖父江ゼミで勉強したいんです。何とか入れて下さい！」…私は頭を下げて直談判に及んだ。  
先生はもう一度自室に戻ってから、根負けしたのか今度は表情を崩してこう言われた…。  
「君の熱意に絆されたとしていいことにしましょう。でも、他の人には黙っていて下さいよ！」  
きっと奥様に言われたのではないか…「いいじゃないの、一人位…あんなに熱心なんだから…」  
これは何年も経ってから感じたことだった。この直談判…座り込みの必要はなく、30分位で終わってしまった！

そんなことで先生や奥様とは、お二人がお亡くなりになるまで親しくお付き合いをさせて頂いた。  
毎年の祖父江会に出ると、なんと後輩にも私と同じような押し掛け組が何人かいることが分った。先生曰く、  
「そういう人の方がよく勉強もするし、仕事もする！！」

私は今でも同年代のゼミ仲間と山歩きを楽しんでいる。  
年に五～六回は行き、2017年7月には上高地で64回目を迎えた。こんな気心知れた仲間達と定期的に楽しい  
時間を共にできるのは、偏に祖父江孝男教授のご高配があったからだと今でも心から感謝している。

## 編集後記

私の学生時代「第二弾」をお届けします。今回は先ず大先輩である安田さんに敬意を表して第一面を飾らせて  
頂きました。私の亡き父も安田さんと同年生れで、海軍に入隊し駆逐艦「初桜」に乗艦していました。戦争が終  
り戦艦ミズーリ上で重光外相が降伏文書に調印したのですが、その「ミズーリを初桜が横須賀まで誘導した…」と  
よく話していました。安田さんの文章が、その時代と重なってきます。両親とハワイ真珠湾のアリゾナ記念館を訪  
ねた時、日本海軍の奇襲で大破した戦艦ウェストヴァージニアの老兵と父が、親しく歓談していたことを懐しく思  
い出します。私の学生時代「第三弾」は、来年発行予定です。みなさんの「思い出」をお送り下さい、(濱田 豊)

発行：明治大学校友会 西東京市地域支部 事務局：西東京市谷戸町 3-1-11(水井様方) Tel. 042-421-2164  
会報編集委員：木村美栄子・栗田孝行・濱田 豊・吉田寿雄